

# ゆめをかたちに

碩田学園校長室だより 第2号

平成30年5月8日(木)発行



## 運転は安全第一で

本校職員の皆さんが、気概をもってそれぞれの業務に精励されていることに心から敬意と感謝の意を表したいと思います。

そうした中ではありますが、日ごろのハードな業務からのお疲れのせいか、つい注意力が散漫になり、運転中にバックをしようとして停車中の車に接触してしまったというような事案が続いています。

「つい、うっかり」では決して許されません。全国各地で、幼い命が奪われる悲惨な事故も頻発しています。ハンドルを握る以上、くれぐれも安全第一で細心の注意を払いましょう。

## 特別の教科「道徳」とその評価の在り方について

道徳教育は、学校の教育活動全般を通じて行う「心の教育」であることは言うまでもありません。この道徳教育のかなめとなる「道徳の時間」が、昨年度の前期課程（小学校）に続き、今年度からは後期課程も「特別な教科 道徳」に変わりました。

人は、自然や社会、他人とのかかわりの中で〇〇だと感じたり、自分は〇〇だと思ったりします。感じたり、思ったりするという人間独特の営みは「心」がつかさどります。でも、「心」は内面的なもので、目には見えません。だから「そんな目に見えない内面性を評価の対象にするなんて」…などと主張する方もいるようです。でも、そうでしょうか。人は常に自分や他の人の行動や内面を評価して、良い人、悪い人などと評価しているし、自他を適正に評価できる資質を養うことも教育の使命ですから、評価の対象にならないなどということはありません。

ところで、学習指導要領は、「各教科」と総合的な時間や特別活動などで構成されていますね。違いは何でしょうか。系統的な指導内容が示されていることについては、いずれにも共通します。違いは、主たる教材としての教科書（または準教科書）が発行されていること、評価規準に基づき数値的な評価がなされることなどです。その中で、道徳は、心の変容（内面）を評価対象とするので、他の教科のように「よくできる」「できる」「もう少し」といった能力に関する観点別の評価やそれらを総合した「評定」を行わずに、「学習状況などに関して記述により評価」とされています。そこが、他の教科と区別して「特別な」としている所以です。できるかできないかを評価するものではないので、道徳の評価で「～ができました」との記述をみると、私は強い違和感を覚えます。

### 【記述による評価の例】

- ◆「〇〇」の学習では「親だから当たり前と思っていたけれど、ありがとうと言いたい」と発表しました。家族への感謝の気持ちが芽生えてたことの現れと受け止めています。
- ◆「〇〇」の学習では「クラスの△△さんは、みんなのために係の仕事をちゃんとやっているの、私も見習いたいです」と発表しました。役割を果たす大切さに気付き、係活動への意欲が高まり、その決意を述べたものと受け止めています。
- ◆「〇〇」の学習で「今は良くて、後になって悔いにならないような生き方をしたい」と発言しました。その後は「損得より善悪」を意識した行動が多くみられるようになったところに、誠実さや正義感の育ちを感じます。

# ゆめをかたちに

碩田学園校長室だより 第3号  
令和元年6月24日(火)発行



## 「道徳科」における評価について

「ゆめをかたちに」第2号で【記述による評価の例】をいくつかお示しました。今回は、もう少し具体的にお話したいと思います。通知表は、児童生徒のがんばりを伝えるだけではなく、先生のがんばりが伝わることで保護者に理解・共感を深めていただくための「よき手段」としたいものです。

所見には、④学習場面、⑤学習状況、⑥学びによる変容（高まり、広がり、深まりなど）などの要素が含まれますが、⑥の記述内容に否定的な表現は禁物です。授業のはじめと終わりでのどのように変わったかをとらえることが大事であることは、特別の教科「道徳」に限らず、どの教科、どの教育活動においても重要ですね。

【例】④本当の友だちとはどんな存在なのか考える学習では、⑤体育大会や部活動を通じて、知恵と力と心一つに全力・集中する経験を思い出しながら話し合う中で、⑥「一緒にいて楽しい関係でいたい」という考えから、「楽しいとはいえないと感じるかもしれないが、困難を乗り越えた先に、よさだけでなく弱点をも認め、励まし、成長しあえる関係でありたい」というように考えを深め、生活ノートの表紙に「切磋琢磨」ということばを書いて、いつもそれを意識するようにしている姿が見られます。

例文	コメント	修正案
思いやりについての学習で、「資料の主人公が余計なことをしたから関係が悪くなった。手出しはしない方が良かった。」という意見を述べ、困っている人がいてもすぐに手を差し伸べるべきではないと、自己の考えを最後まで主張することができました。	道徳の本質は、価値に対する内面の変容や実践を促すことだといえますので、道徳的な価値の自覚や実践といった側面での「評価」が求められます。 自己主張が「できた」かどうかを評価するものではありませんよね。	思いやりについての学習で、落ち込んでいた友人に「わかるわ」と声をかけたところ「何がわかるというの」と返された苦い体験から、「そっと見守る思いやりもある。」と発表し、相手の立場や状況に合った思いやりのかけ方を意識した行動が見られます。
教材の中の場面に対して、自分がその場面にいたら、どのように行動したかを考えた発言をしています。その成果として、性格も前向きで明るくなってきました。	道徳は、児童生徒の性格を評価の対象にするものではありませんよね。児童生徒の姿・言動を道徳的な価値に照らして、自覚・判断・実践といった視点から評価することが大切です。	勤労についての学習では、委員会活動での自分の言動を振り返ることで役割と責任、全力集中し協働することの達成感や喜びについて考えを広げ、今後の自己目標を「全力集中・共感前進」の8文字で表していました。
他の子に比べて発言は少ないですが、他の子よりじっくりと考えています。ノートを見ると、友人の考えの良いところを取り入れ、考えを深めていることが分かります。	児童生徒の姿を否定的にとらえ「発言が少ない」とか「うそをつき、その場しのぎをする日ごろの自分の姿」といったマイナス面を強調するということは、教師に対する保護者の不信感を募らせるだけで何のメリットもありませんし、教材の主人公や他の児童生徒と比べたりするような表現も適切ではありません。	教科書に登場する主人公のあきらめない姿と自分のこれまでの経験や今の姿と重ね合わせ、ノートの記述から「根気強く続けることやいやなことにも挑戦する気持ちを持ちたい」との意欲が感じられます。
「正直」についての学習では、うそをつき、その場しのぎをする日ごろの自分の姿と登場人物の姿とを比べて「正直に生きることが大切だ」と反省したところに成長を感じます。	一人一人の内面的な変容を「よさ」ととらえて、それを認め、励ますような「個人内評価」としたいものです。	「正直」についての学習では、うそをつき、その場しのぎをしたために周りの人たちから愛想をつかされた主人公が「周りの人たちのやさしさに甘えていた自分の弱さ」に気づいたことに着目し、「甘えや弱さに負けない心をもちたい」との考えをノートに書きました。

# ゆめをかたちに

碩田学園校長室だより 第4号  
令和元年7月2日(火)発行



## 「道徳科」における発問について

前号に引き続き、特別の教科「道徳」に関する資料を作成しました。

私は、道徳の授業で読み物教材（教科書）の内容をもとに設問を構成する際に、前半では「ねらいとする道徳的な価値の自覚化」、後半には「ねらいとする道徳的な価値の実践化」を促すような発問になっていれば良いと考えています。ゴシック体の部分はよく読まない「なんだ、同じか」と思われるかもしれませんが。違いは、道徳的な価値の「自覚」と「実践化」です。



教材に出会う前の児童生徒一人一人の道徳的価値の自覚に関する実態（今の自分）が、授業で教材と出会い、そして友だちとの対話や教師の説話などを通じて変容するプロセスに着目すると、ねらいとする道徳的な価値の自覚が深まる（高まる、広がる、揺さぶられる）などの心の動きが見られ、道徳的実践へと働きかける、あるいは実践につなげる営みが道徳の授業といえるのでしょうから、自覚と実践化が設問構成のポイントになると考えます。（ちょっと理屈っぽくてごめんなさい。）要は、心の動きに着目！です。

### 例文（前期課程）

●●の学習では、「許せるかどうかは自分の受け止め方次第」との友達の意見に共感し「腹を立てない」と決心していました。（57字）

●●の学習では、困難を幾度も乗り越える主人公の姿から「補欠でふてくされていたがレギュラー取りに挑戦する」と発表しました。（60字）

●●の学習では、ポイ捨てしたことを反省しながら「地球を傷つけないようこれからはノートや鉛筆を最後まで使う」と考えました。（60字）

●●の学習では、「親だから当然と思っていた自分が恥ずかしくなったから毎日何か手伝いをしたい」と考えるようになりました。（59字）



### 例文（後期課程）

はじめは「当人同士の問題で自分には関係ない」という考えに賛成していましたが、「無関心は無責任」「悪を放置すると助長する」という友達の発言を聞き、「無関心のせいで悪がのさばるのも怖い」と考えるようになりました。（102字）

「勇気を出して悪に対峙するべき」という友達の意見に対し「まだ勇気はもてないし、正直言って首を突っ込まない方がよいと考えているけど、せめて自分は注意されたりきまりを破ったりしない」との思いを強く持ちました。（102字）

「決まり」を守る社会を創るためにできることを考える授業では、役割演技を通じて注意する難しさを実感しながらも「見て見ぬ振りも良くない。大人に知らせたり警察に連絡をしたりならできるかもしれない」と考えました。（102字）

自分らしさについて考える授業では、教材の主人公の不安や悩みに共感しながら「単に人と違うことや目立つことを個性ととらえるのではなく、自分の持ち味やよさを発揮して悔いなく生きていきたい」と発言していました。（101字）

# ゆめをかたちに

碩田学園校長室だより 第5号  
令和元年7月3日(水)発行



## 「道徳科」における“対話”について

今回も、特別の教科「道徳」に関する資料を作成しました。

道徳の教科書の読み物教材にはオープンエンドのものもあります。学習対象となる道徳的な価値についてある程度の価値観が教材の中には示されていないか、背反するものの複数の見方や考え方が示されたのちに、主人公の考えがどちらなのかが記述されないままに話が終わっているような教材のことでです。

このような教材こそ、授業の中で児童生徒同士の対話によって、一人一人の多様なものの見方や考え方を交流し合うことによって、自分自身のものの見方や考え方（道徳的な価値の自覚）が広がったり、深まったり、高まったりしていくとよいですね。



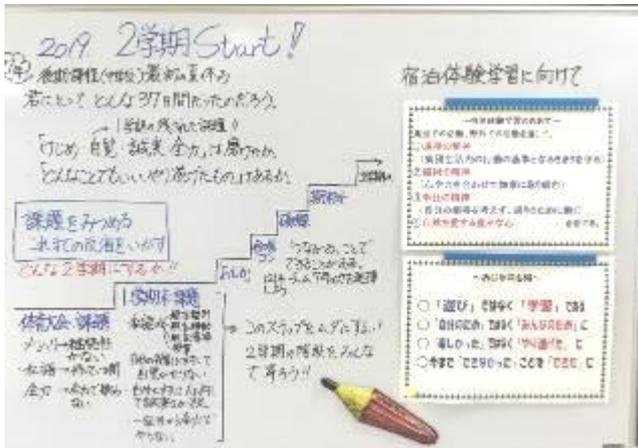
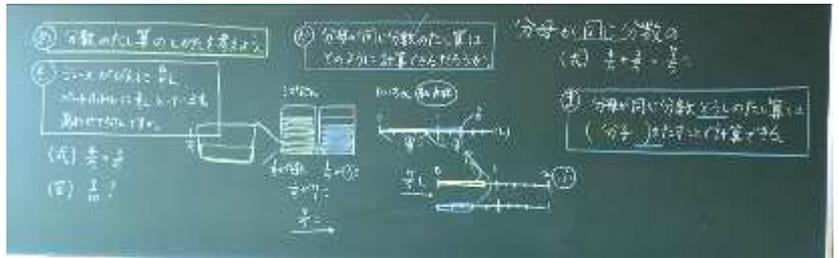
一方、英雄や偉人の伝記のような教材も多くあります。このような教材の場合、読む者の多くが、主人公の生き方や業績に感動を覚えますので、そのどこが素晴らしいのか、あるいはなぜ自分は感動したのか、主人公のどのようなところが自分の考え方や生き方（行動）に生かしていけそうかなどのテーマで話し合い活動を行うと良いと思います。

教材のタイプは様々ですが、道徳科の授業における対話は、人が他の人や社会とのかかわりの中で、多様性を感じ取りながら、自分自身がどのように道徳的な価値を自覚し、広げ、深め、高めていくかというプロセスにおいてきわめて有効かつ重要な学習活動なのですよね。

文案	コメント
「電話のおじぎ」の学習では、礼儀の大切さを知り誰に対しても真心を持って接することが気持ちの良い生活につながると気付いたようでした。(65文字)	素晴らしい。「真心を持って」を「真心こめて」に、「気付いたようでした」を「考えました」にすると計5文字減らせて「気付いたところに成長を感じます」とできますね。
「電話のおじぎ」の学習では、相手が目の前にいてもいなくても礼儀正しくする方が気持ちが伝わるといふことに気付いたようでした。(61文字)	素晴らしい。「～方が」という比較の問題ではないので、「礼儀正しくするとより気持ちが伝わることに」とするとさらに良いかも。
「電話のおじぎ」の学習では、目の前にいない相手におじぎをするのは変だと考えが、相手の存在そのものを尊重しているからだに変わりました。(67文字)	いいね。「の学習」を省いて64文字になるから、それで完璧ですね！
「心の優先席」の学習では、みんなの意見を聞き、誰かを思う心が形になったものがきまりでありだといふことに気付いたようでした。(61文字)	いいね。みんなの意見を聞く前にどう考えていたのでしょうか？「窮屈だと考えていたきまりが、みんなの意見を聞き誰かを思う心が形になったものだと考えるようになりました。」ではどうでしょうか。
「友だちや」の学習では、思いやりを持って相手と関わり、思っていることを言い合えるのが本当の友だちということに気付いたようでした。(64文字)	「本当の友だち」の価値観（見方・考え方）は人それぞれだし、同じ人でも時や場、成長の度合いによって変わってくるものから、固定的な価値に「気付いた」ではなく「…だと考えました」がよいでしょう。

# ゆめをかたちに

碩田学園校長室だより 第7号  
令和元年 8月28日(水)発行



## ものごとの見方・考え方

高校野球

ファンの方は本校教職員にも多いと思います。18日の準々決勝第2試合は仙台育成と星稜の強豪同士の対決でした。星稜の先発投手は2年生の荻原選手。場面は7回裏2アウト。3球目を投じた際、荻原投手の右手首が攣ってタイムがかかりました。その時、マウンド上に駆け寄り荻原投手に飲み物を渡す選手がいました。その選手は、仙台育英の小濃選手。対戦相手チームの選手がマウンド上の投手にスポーツドリンを手渡したのです。

テレビの中継やネットでご存知の方もいらっしゃるでしょう。みなさんは、この様子をどのようにお感じになるでしょうか。小濃選手は、宮城大会でデッドボールを受けたチームメートに、相手チームの選手がコールドスプレーをかけてくれた経験から、「次は自分が…」と置いていたようで「当たり前のことを当たり前にとただけ」と試合後のインタビューで語ったそうです。多くの方々が、「グラウンド上に敵はいない」という彼の言動を「さすがすごい」と感じたことでしょう。

一方、「点差が離れて勝負をあきらめたのか。接戦でも敵に塩を送れるか。」「売名行為。星稜に恥をかかせただけ。」「勝負の最中にあり得ない光景。」「この程度のことを報道で美談として取り上げるから、世の中がますます甘ったるくなる。」などの意見もあるようです。言論の自由は保障され、ネット上などでも姿の見えない人の様々なものの見方や考え方に否が応でも触れる世の中だと実感しますし、多様化・複雑化の象徴のようにも思えます。

人はそれぞれに、いろいろな考え方をしますし、場所や時代によって異なるため、どの考え方が正しいか、間違っているかということが単純に判断できないのは確かです。だからこそ、ゆるぎない価値の規準を持つことが重要です。同時に、教師である私たちには、次代を支える子どもたちが他者から押し付けられた既成の価値を妄信することなく、自ら考え、異なる考えに出会う中でその価値規準を見出し、確かめ、高められるような力を育てることが大切です。

本校の経営に当たって、私は皆様方に「ちがいを豊かさに変えて～みんながしあわせを感じられる愛のある学校づくり～」を目指していきたくとお話しさせていただいています。そして、皆様方はこの方針に沿ってしっかりと職務遂行されています。ですので、いつも感謝の思いでいっぱいです。実は、本校の経営方針は私自身の「価値の規準」を表現したものです。問題に接したときの分析や解決の方法のほか、対処の在り方について考えなければならないときにはちがいを豊かさに変え得るものであるかどうか、みんながしあわせを感じられる愛のあるものとなり得るかどうか、この規準(方針)に沿って判断したいと考えています。

## Pleased to meet you!

ALTのガブリエルさんが別府に転勤となり、ジェイコブさんが本校常駐となりました。

なお、毎月数回程度の頻度で本校に派遣されるALTさんは英国出身のマーガレットさんです。今日が本校での初めての勤務日となります。



# ゆめをかたちに

碩田学園校長室だより 第8号  
令和元年11月4日(火)発行

## ノーサイド ラグビーという

競技は、他のスポーツとちょっと異なるところがあると思います。ワールドカップが日本で開催され、大分でも試合がありましたから、にわかファンになった人も多いと言います。私もその一人です。



【マナーアップ講座でお辞儀の仕方を学ぶ8年生】

## 思わず体が…

テレビで観戦していて、スクラムやモールで押し合っただけで密集の中から魔法のようにボールが出てきてラインでボールをつないでいく様を見てみると、ボールや選手の動きによって、思わず自分の体が右に左にと傾く感覚を味わいます。他のスポーツを観戦していても、そのような感覚はなかなか起こりません。一瞬で防御のカベを破って駆け抜けトライに結び付く場面も痛快です。そして、激闘を終えた瞬間の互いの健闘をたたえ合う姿は爽快ですよね。どこかの国のある選手が「僕たちは世界一を目指して戦っているが命を懸けているわけではない」と言っていました。優勝した南アフリカのキャプテンは「自分たちの国は色々な問題があるがラグビーができることに感謝して一つになって成し遂げることを示すことができた」というようなお話をされていました。自らの名誉のために戦っているのではなく、自分たちが一つになって結果を残すことで何か目の前の困難を改善したいという崇高な目的のために…という思いが伝わり、心が熱くなりました。今度は、ぜひ生で世界大会の試合を見たいです。

## 実習協力校の会議で



大学、付属小、金池小、寒田小と本校で本年度の教育実習実施上の課題などを協議しました。その中で、実習中に協力校の指導教員（担任）は実習生に何を指導するのかという根本的な議論を投げかけました。とりわけ、指導案の書き方に関しては、学部でしっかりと指導していただいて、実習中は「ねらいや学習活動及びその評価の手立てが児童の実態に即しているかどうかという点に集中すべきだ」との意見を述べさせていただきました。どの協力校においても、共通してその点に集中して指導することで、協力校間の隔たりもなくなると考えます。

## 行ってきます!

今日から8年生の修学旅行。テーマは「一寸光陰～学び（礼儀・協力・行動力）を深め、大きく成長～」です。留守中よろしくお祈りします。

少年老い易く学成り難し

一寸の光陰軽んずべからず

未だ覚めず池塘春草（ちとうゆんそう）の夢  
階前の梧景（ごよう）已（すで）に秋声



# ゆめをかたちに

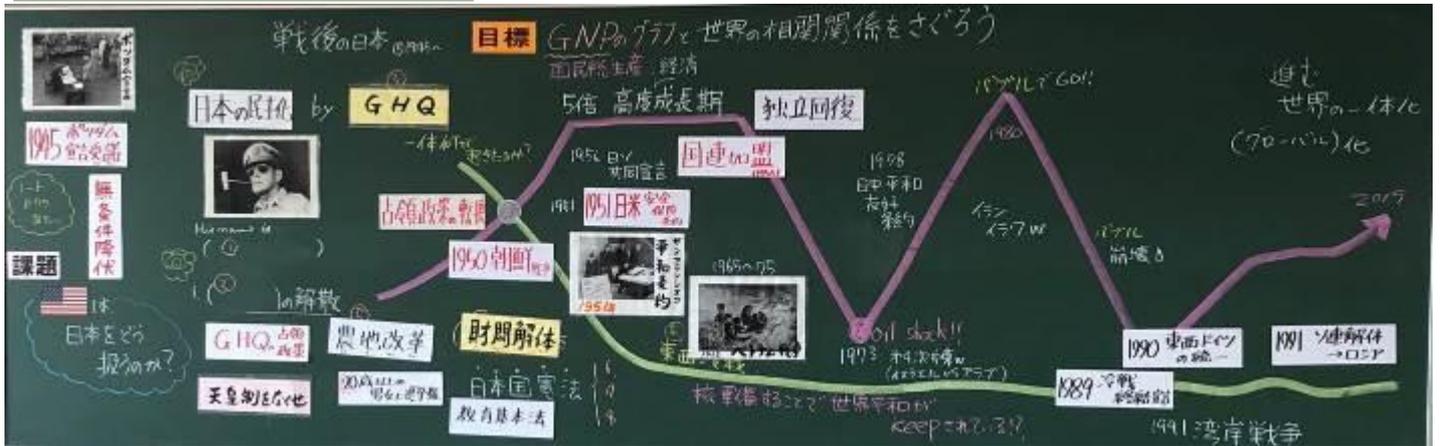
碩田学園校長室だより 第9号  
令和元年 11月14日(木)発行

私が授業に関して皆さんにお願いしたいことは次の3つです。いつもお話ししているとおりです。

- ① 解決の過程における対話の重視
- ② 板書の構造化
- ③ ICT活用などによる授業のUD化

下の写真は社会科の井上指導教諭の板書です。この時間の学習内容「戦後日本の民主化、政治や経済の動き」が一目で分かりますね。

## 構造的な板書…



## アートな秋に



写真左上は、碩煌祭での8年生の学年制作「クラーク博士」です。アトリウムに展示しているので、皆さんご覧になったと思います。約5,000個(86列×56段=4,816枠)のペットボトルのキャップを利用して作られています。これだけの量を集めること、色合いをそろえること、そして一つ一つ固定すること、壊れないように立てることなどたくさんの苦勞がことでしょう。

左下は、5年2組の澤村花梨さんの夏休みの工作。英字新聞を再利用しリボンと首輪の赤がアクセントになっていて、とってもかわいい仕上がりですよね。



写真右は郷土が誇る日本画家高山辰雄画伯の原画をモチーフにした7年生のモザイクアート。著作権の関係でちゃんと事前に使用許可を得て作業にかかるなど、さすが抜かりがありません。



## 人事校長会

12/3 に人事校長会があります。例年より早い時期の開催です。その背景には、人事異動に関する従来の規定(異動基準)に変更が生じているのではないかと思います。

開校3年を経過し、本校では職員の皆さんに徐々に計画的な異動を検討願うこととなります。期末事務で何かと忙しくなる折に恐縮ですが、面接や調書の提出など、ご協力をお願いします。

